

## 卷頭言

# 中国・福州教会訪問記

梅津順一

私は昨年7月に、青山学院院長に就任しましたが、その夏、思い切って中国の福州に行ってきました。青山学院初代院長のロバート・マクレイ先生は、日本上陸以前に25年ほどの中国伝道の経験があり、その足跡をたどってみたいと考えたからです。牧師の妻とともに、羽田から香港に飛び、一時間ほど折り返すような形で、福州の空港に降り立ちました。事前の情報として、マクレイ博士たちが献堂した天安堂教会がいまも健在であることを聞いたからで、当地でガイドをお願いして、到着の翌日タクシーで教会に向かいました。

プロテスタント諸派の中国伝道は、清末の開港地で開始されました。清はアヘン戦争の敗北の後、イギリスへの割譲した香港の他、上海、寧波、福州、廈門、広州という港町を西洋諸国に開き、外国貿易が行われるようになるとともに、キリスト教伝道も可能となりました。アメリカのメソジストの伝道地は、福建省の省都、福州で、ほぼ台湾の対岸に位置します。メソジスト教会は、ほかの伝道団体が比較的手薄な福州を選びました。

メソジスト教会の福州伝道が開始されたのが1847年で、マクレイ博士は半年遅れの第二陣の一員として福州に到着。中国語、とくに福建語を学び、また当地の文化、習慣にも慣れねばならず、熱い厳しい気候で健康を害する宣教師も多く、伝道は困難を極めました。最初の受洗者を得るのに、10年近くかかったといえますから、宣教師の粘り強さも大変なものでした。中国人は教会堂の

献堂の後、海外からの伝道者の覚悟を知り、キリスト教を受け入れるようになったといわれています。メソジスト教会が福州に建てた最初の教会堂は、「真神堂」と「天安堂」で、このうち「天安堂」教会が今日まで続いています。

日本の初代のプロテスタントとして、横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドが有名ですが、彼らは知的探究心の旺盛な若きエリートたちでありました。本多庸一先生が横浜で英語を学ぶ中で聖書の神に出会ったし、熊本洋学校のジェーンズ先生、札幌農学校のクラーク先生は教育に携わりつつ、聖書も教えた。そうしたなかで日本人信徒が生まれたわけです。福州のメソジスト教会で最初に洗礼を受けたのは、陳さんという福州郊外の農民だったそうですが、中国の受洗者たちは一般に庶民でありました。また、若者ではなく熟年といえますか、三十代とか四十代の人が多かったといえます。熟年の彼らは、かなり長い時間をかけて、数年ときには十年間かかってようやくキリスト教を受け入れた。また、中国人受洗者は自分だけではなく家族も一緒に受洗する場面が多かったようです。

日本でもそうですが、メソジスト教会は中国で教会と共に学校も建てています。宣教師の周りに小さな学校が生まれたのは日本の場合とよく似ており、最初は日帰りの学校に生徒が集まり、のちに本格的に教育に取り組む場合には寄宿学校となりました。男子の宣教師が男子の学校を建設し、その御夫人がしばしば宣教師ないし宣教師補となり、女子のための学校を開いています。日本の場合もそうですが、女子の学校はアメリカの教会の婦人たちが献金で支えたことを忘れてはなりません。

現在の天安堂教会は会員数 1000 人余り。日曜礼拝の出席者は 400 名ほどの教会となっています。牧師二人、伝道師二人の教会です。天安堂教会には事前の約束もなく訪問したのですが、日本のメソジスト教会のルーツを探りにここに来たと告げると、大変喜んでくださり歓迎してくれました。建物としては現在の教会堂は三代目、2006 年に創立 150 年をお祝いしています。牧師の一人は女性で、牧師の妻も中国教会の女性牧師と知り合うことができたことを喜びました。

この教会は中国のメソジスト教会の発祥の地で、ここから中国各地に伝道が行われました。また福建省は東南アジアに出かけた華僑の出身地でもあり、福

州から東南アジアに出かけてシンガポールとかマレーシアとかそうした土地で教会を作った人たちもいると聞きました。東南アジアの華僑はキリスト教徒が多いと聞いたことがあります、そのルーツが天安堂教会であったわけです。陳牧師は天安堂がこれからも、キリスト教伝道のセンター的役割を果たしていきたいという抱負をもっておられました。

教会堂一带はかつての外国人居留区で、西洋風の建物も多く、福建省の政府の方針で、この地区の西洋風建物を改修保存し、一帯を歴史公園にする計画であるそうです。天安堂近くには、かつて教会が保有していた建物があり、政府に接収されていたのが、改修の上教会に返還されるとのことです。そのなかには、教会関係の印刷所もありました。教会関係の印刷所としては、日本でいえば教文館にあたります。そうした教会関連の建物が一時別の目的で使用されていたのが、共産党がそこに住んでいた住民をほかの建物に移し、それを改修して教会に引き渡してくれるというわけです。ただし、内装は教会の費用で改修しなければならないとか、陳牧師によれば、その資金の調達が現在の課題だが、改修後は、一部を歴史資料室としたい、についてはぜひ日本の資料も展示したいとのことでした。マクレイ先生を通して中国の教会との関係ができれば素晴らしいことだと思います。

教会関連の学校も近くにありましたが、学校の方は、正確な経緯はよくわかりませんが公立の学校となっています。男子学校は福州高級中学として存続。かつての礼拝堂は、残念ながら体育館として使用されていました。女子の学校は、華南女子学院となっています。この二つの学校からは、中国のすぐれた科学者、知識人が輩出したことが知られています。彼らは教会関係学校を卒業後、アメリカ留学の機会を与えられて、一流の科学者となりました。日本でも、青山学院や同志社などキリスト教学校が、著名な学者を輩出した実績があります。

ところで、私どもが訪問した直後に完成するという福建省の神学校にも案内していただきました。福州の郊外、といっても車で20分ぐらいのところにあつて、立派なキャンパスが福建省の政府の多大の援助のもとに作られたと聞きました。中国の教会は、比較的古い教会、日本で日本キリスト教団に相当する中国の教会は三自愛国教会と言われます。三自というのは、自養・自治・自伝、

自養は、自分で自分を養う、つまり外国からの援助を受けない、自伝は自分で伝道するということで、外国の宗教団体からのコントロールを受けない、教会。その意味で、中国共産党の公認プロテスタント教会ということになります。天安堂はこの三自愛国教会ですが、それもあってか政府とは友好的な関係にあって、建物も返還してもらえたり、神学校の建設も援助してもらえたことになります。

中国の非公認の教会は「家の教会」と呼ばれ、いわゆる福音派に近い教会です。その実態はよくわかりません。最近の研究によれば、カトリックを含むすべての中国のクリスチャン人口は、7パーセント。とすれば一億人に近いクリスチャンがいることになります。

マクレイ博士は中国で伝道するかたわら、福建語の英語辞典、福建語での新約聖書翻訳などの著作を残しましたが、もう一つ興味深いことに Life in Chinese と題された伝道報告書があります。そこには中国伝道の使命への確信が語られています。マクレイ博士は中国の宗教、文明、文学は沈滞し、もはや中国社会を作り上げる精神を提供できていないといいます。かつての正統思想儒教はこの役割を果たせず、道教、仏教も力を失っている。マクレイ博士は中国でもキリスト教が社会形成の役割を果たすと考えました。

もちろん、当時マクレイ先生たちの伝道はわずかに福州の町にいくつかの拠点ができただけで、広大な中国全土を考えれば、ほんのわずかな点にすぎません。そこで生まれたキリスト教信徒もわずかな数にとどまっていた。しかし、マクレイ博士は中国がこれから近代国家を作り上げるにはキリスト教が必要だと、中国伝道の使命を考えていたのです。ただし、マクレイ先生たちは、キリスト教の伝道を行ったのであって、政治活動とか社会運動などを指導したわけではありません。しかし、キリストの教えが中国の社会をよい方に変えていく力があると確信していたのです。

それに中国では女性が悲惨な立場に置かれていた。男系の血統が重視される結果、女子の誕生が喜ばれないだけでなく、赤子の育児放棄、捨て子が珍しくなかった。ましてや、中国では女子に教育を授ける発想はまったくありませんでした。明治維新以前の日本でもある程度同じことが言えたのですが、中国社会でも日本社会でも、積極的に女子教育に取り組んだのはキリスト教であったことは忘れられてはなりません。中国ではまた、上流家庭の女子には纏足の習

慣がありました。幼児期の女子の足が親指を除いて四本の指を曲げて変形させ、歩行の自由を奪う習慣があったのです。そうした伝統的な陋習を断ち切るには、キリスト教が必要でした。マクレイ博士たちはそのようなことでも、キリスト教伝道は中国に貢献できると考えたのです。

私ども日本のプロテスタントは、自分たちのルーツとしてアメリカ・カナダを意識することはあっても、中国を意識することはありません。今回の福州訪問は、中国、それに韓国の諸教会との比較という、新しい視点を与えられました。

(青山学院・院長)